

平成十五年三月二十日脱稿

転入生 トーシヤ（敏夫） たなか踏基

曇天の遅い信州松本の春は、静かだった。

小石をぽんと空に放り上げただけで、その静かさが破壊されてしまうかと思わせた。その静かさの底に沈殿してくる、息苦しい衝動にトーシヤ（敏夫）は気付かずじっといた。信州松本の春は、四月に入ると同居の叔母の下宿の窓から遠くに見える測候所の道を遡りながら、何時ものように今年も確実にやってきていた。城を見通せる小道の端を右折して、白い測候所の門脇まで、道沿いに植えられた細い木々の芽吹きにその兆しが読めたからである。この辺り一体は、通称松本の文化村と呼ばれ、大学関係者、高校教師、画家、音楽家、医者や外国人が住む場所であった。

転入生赤毛のトーシヤ（敏夫）は、日本生まれのドイツ育ち、今でいう帰国子女である。父親の郷里、松本F校には、当時の日本の英語教育一辺倒の中で珍しくドイツ語を教える学級があった。転入生トーシヤ（敏夫）にとつて、春は余り良い季節ではなかった。先ず松本の高校生活とのカルチャーショックもあつてか、あまり精神状態は良くなかったからだ。ドイツ人母と日本人父の血をひくトーシヤ（敏夫）が、帰国後初めてここ信州松本の地

の静かな春に、同級生や付近住民から好奇の目で迎えられたからではない。生物にとつて春は、明日への命をみなぎらせて性が芽生え、予感と期待に弾む季節であり、活動を約束する季節であつたとしても、単身帰国のトーシヤ（敏夫）にとつては身裡から湧き上がってくる得体の知れぬ朧なる混血の魂、ドイツ人母譲りの狩猟民族の血に困惑する季節であつたからである。それが若さというものならば、その若さを持って余していたと言つてもよい。

転入生トーシヤ（敏夫）は、苦手の数学の復習に飽いて、本から目を上げ窓ガラスの上を懸命に飛び廻る日本の小虫を目で追つていた。身体のわりに足が長く、羽根も長い小虫だった。その小虫は引き下がることを知らず、ガラスの壁を撫でるように衝突するだけで、己の前進を拒む物体を理解できないでいた。その長い足は何度もばたばたと空を掻き、身体を空中に浮かべるための羽根も、ガラスの冷たい感触のまえでは浮力すら減退させた。しかし、小虫は、何時までも無知のまま猛進しやがて前進の力がみなぎった時に、その物体を突き破つて外に出られるのだと信じて疑

いないかのごとくであった。

窓は半分開いていた。だが小虫はそこに行き着けなかった。一度ガラスの面を這つて窓の棧まできて、そこを飛び越せば前進を阻む物体が無いにもかかわらず、また好んで前のガラスの面に戻つてしまつた。トーシヤ（敏夫）は、小虫をみている内に焦燥感に駆られた。それは、小虫の焦燥感がトーシヤ（敏夫）に感染したというのではなく、自分の内部から湧き出した自分自身の焦燥感といつてもよかった。棧を越えれば、自由になるではないか、何故好んでそのガラス面を舐めるように戻つていくのだ……

小虫はなおも空を掻いた。机に向かつてじつと眺めていたトーシヤ（敏夫）は、立上つて窓を大きく開けその小虫を開放してやるうと思つた。小虫の徒労の連続に同情したのかも知れない。本当は小虫の徒労は、トーシヤ（敏夫）の徒労と別次元にあつたのだが……その瞬間！ 小虫は残虐な指先でたわいもなく圧死していた。小虫の死体を窓から捨てると、一つ大きく伸びをして、愛用の「ヤツケ」（ドイツのジャンパーのようなもの）を羽織つて散歩にでた。家から国立結核療養所のある城山に続くトーシヤ（敏夫）のみつけた散歩コースが、ドイツの森に似ていたのは大きな救いだった。

デュッセルドルフの中心街はライン河の右岸にあり、日本人学校は左岸のオーバーカッ

セル地区にあった。子供の通学の便を考えて、大勢の日本人がオーバーカッセル地区に住むようになった。人口数十万人のデュッセルドルフには留学生も含めると、一万人以上の日本人が滞在するようになり、そのコミュニティでは何不自由なく生活できた。日本人観光客の多いミュンヘン、ベルリン、フランクフルト等の都市と異なり、同じライン河に面した商都ではあったが、デュッセルドルフは観光資源には乏しい街である。旧市街には小さな醸造所が林立し、「Atelier（アルトビア）」の試飲が何時でもできたので、滞在者のみならず、此処でドイツビアのファンになった日本人旅行者は多かった。

トーシャ（敏夫）が四歳、十五歳になるまでの約十年間、一家はデュッセルドルフ暮らしであった。知人を頼りケルン大に留学した父は、そこで母と出逢い二人は一緒に拳式のため帰国した。ドイツ人の母は日本の生活に殆ど馴染めなかった。トーシャ（敏夫）が生まれて四歳になると、一家はドイツに舞戻り、日本人コミュニティから離れて暮らし始めた。ライン河沿いのケルンは、デュッセルドルフに車で二十分の距離にあるが、人口は百万人を越えるドイツ第四の都市である。日本生まれのトーシャ（敏夫）は、はじめ母の勧めもあってデュッセルドルフの日本人学校に通ったが、ケルン寄りに転居してからは、中学校はギムナジウム（高等中学校）に通うようになった。

隣家ペーターマン一家の先祖はイタリア系ドイツ人であった。一人娘のシルヴァーナは敏夫のことをトシオと言えずトーシャと呼んだ。いつの間にか敏夫の愛称トーシャが定着し、敏夫一家もシルヴァーナと言わずにシルヴァーナまたはシルヴィーと呼んだりした。五歳のおしゃまな一人娘シルヴァーナは、三歳年長の大好きなトーシャ（敏夫）のお嫁さんになるんだとママに何時もいついたし、トーシャ（敏夫）のママにもそれを頼んだ。母親同士が偶然同じケルン出身だった気安さで家族同士は親しくなり、ドイツの丘と森で一緒にピクニックを愉しんだりした。

「学生さん 人工呼吸のやりかた知っているかね。」

「えっ、ハイ……」
ジンコウコキウと頭の中でトーシャ（敏夫）は反芻したが、とっさに日本語の意味が理解できなかった。でもその切羽詰った皮ジャンパーの男に促されて、何となく駆けた。駆けながらやっと意味がのみ込めると、ドイツの体育の授業でやった人工呼吸法を頭の中で思い出していた。小さな池に続く小道を曲がると数人の人だかりをみた。その中の一点が急に膨らみ、もう一人の職人風の男が走り寄ってきた。

「この学生が人工呼吸できると。」
「そっか！おれポリ公と医者を呼んでくるで。」

ペイント缶を付けたオートバイが一台、その周りに二台の自転車があった。油の付いたボロ布が燃されていて、そこから黒い煤けた煙が晩春の空にゆらゆらと昇っていた。その傍らに、下半身を職人の印半纏でくるまれた、素裸の小さな女の溺水者がいた。兄妹とおぼしき連れの兄は、びしょ濡れの洋服からぼたぼたと水滴を滴らせながら、泣きじゃくっていた。兄妹して沼にはまったところを、通りかかりの二人の職人に救助されたのだ。

「ピーピー泣くんじゃない！」

トーシャ（敏夫）を連れてきたそのペンキ職人は、容赦なくその兄を怒鳴りつけた。その子はすっかり怯えて泣くばかりだった。トーシャ（敏夫）は、職人の自分に向けられた好奇の目に不安を感じる余裕もなく、ドイツで習ったとおりに開始した。でも初めは、テナポが次第に速くなってしまふようだった。何回も気を取り直すと、初めのゆっくりとした調子に戻るよう意識した。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

肩甲骨の下方に両の掌を溺水者の頭の方向からあてがい、腕を延ばしたまま自分の体重を少し両腕に掛ける。次に掌を離して女の子の両腕を静かに心持ち上げるように手前に引く、胸郭を広げるとともに、呑み込んだ水の吐出をも同時に促すこの方法を、ただ五秒間に一動作と心に念じながらひたすら続けた。当時、トーシャ（敏夫）がドイツの九年制のギムナジウム（高等中学校）で習った方法

は、現在のよゝなマウス・ツィ・マウス方式の人工呼吸法ではなかつた。トーシャ(敏夫)は続けながら自分の心臓の鼓動を聞いていた。十分もやると、極度の緊張とそばのボロ布の燃える熱気で全身に汗をかいた。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

女の子は、時々音を立てて水を吐いたが、意識は回復しそゝになかつた。傍で見守る二人の職人の無知さ加減や無責任な発言がトーシャ(敏夫)を苛立たせた。ドイツの学校で体育の時間に覚えた人工呼吸法は、《ただひたすら単調に繰り返す》、少しだまつていて欲しいと怒鳴りたかつた。

「もうちよつと早くしたらどうだい。」

「まだダメか・・顔が白いな」

「このまま お陀仏かな」

時折発する「ゲー」といふ肺から洩れる呼吸の兆候がトーシャ(敏夫)を勇気付けたが、一刻も早く警察官と医者が出て欲しいと祈つた。人工呼吸を続けながら、トーシャ(敏夫)はラベルのボロ口の単調なフレーズの繰返しを思い浮かべていた。ドイツのギムナジウム(高等学校)で人工呼吸法を学んだ時、何故かこの曲が鳴つていたので思い出したからだ。トーシャ(敏夫)は馬鹿になつてその曲を心に念じていると、繰り返す動作がリズムに慣れるよゝな気がして落ち着けた。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

「アインツバイドライ・アインツバイ」

白い柔らかな小さな女の子の肌が次第に赤みを増し、小さな背中が擦られるたびに垢となつて剥がれてきた。その赤い肌上によれた垢が、黒点や黒い棒がころころと転がつた。医者が看護婦を連れて車でもつてきた。二人ともチラリと赤毛のトーシャ(敏夫)に好奇の目を向けたが、女の子の瞳孔と肛門を調べるとそのまま続けるよゝにトーシャ(敏夫)を促した。

警官が野次馬を連れてやつてきた。警官は事務的口調で、発見者の職人二人に救助状況を聴取した。医者が女の子の腕に強心剤をうつた。女の子の母親が血相変えて、毛布を持つて飛んできた。

「いま、動かししたら駄目！」

医者の鋭い叱責の音が飛んだ。仕方なく母親は、持参の毛布を女の子の小さな尻に掛けた。若いその母親のすがるよゝな視線に、それでいた未経験のトーシャ(敏夫)を責めるよゝな必死の一瞥の祈りがあつた。野次馬の音が耳に入つた。

「女学生ですか？」

「いいや、そうではないですよ、女の子

五、六歳の・・」

「自殺ですか？」

「まさか」

「人工呼吸やつている外人ですか？」

「学生らしいですよ。近くの松本F校の・・」

かつてな野次馬の憶測にトーシャ(敏夫)は苛立つた。女の子の弱く柔らかい肌が破れ

て薄つすらと体液が沁みだしてきた。トーシャ(敏夫)は罪を犯しているよゝな錯覚を覚えた。何百回と摩擦の繰返しで、幼い肌がペロリと剥けて捲れ上がるのではないかと不安になつた。野次馬の視線は、トーシャ(敏夫)を敵視しているかよゝに思えた。この女の子の裸に、トーシャ(敏夫)はペーターマン家のおしやまで愛くるしいシルヴァーナの姿を重ねていた。何故かドイツの幼年時代の思い出が鮮明に蘇り、興奮していた。

ドイツ人は散歩の好きな国民である。街から一歩離れると直ぐ、平地や丘陵部に森や林が点在し、森林浴が誰でも気軽に楽しめる地形のためである。このあたりが、山間部に森や林が開ける日本の地形とかなり異なり、ドイツ人にとつて森に遊ぶ感覚は、散歩そのものであつたからである。

ラテン語シルヴァ(silva)は、森、林、果樹園等を意味する言葉である。つまり森は豊穡の象徴で、アメリカDenysylvana(ペンシルヴァニア)やルーマニアTransylvana(トランシルヴァニア)は、「豊穡な土地」(トランシルヴァニア)は、若者向け日本車に同名を冠した車が存在するが、この女性名シルヴァニアに、一体どんな願いを込めたのか命名者に聞いて見たい気がする。

トーシャ(敏夫)は捕虫網を、シルヴァーナは虫取り籠をぶら提げていた。帽子を被つて家をでると何時ものよゝに森へ連れ立って

遊びに出かけた。二人は兄妹のようだった。

「トーシャ ほら！ 蝶々」

それは綺麗な羽のバルナシウスというアゲハの一種だった。シルヴァーナはリボンの付いた帽子を脱いで何処までも追い駆けた。

「だめだったら、シルヴィーいま探つてやるよ。みろー逃げちゃったじゃないか。」

トーシャ(敏夫)は、あげは蝶をとってシルヴァーナに与えた。眼前につきだされたあげは蝶は、シルヴァーナの指の中で鱗粉を輝かせて羽ばたいた。その時、トーシャ(敏夫)は、幼い女の子とも思えぬシルヴァーナの残酷性をみた。突然蝶の腹を指でぐいと押さえた。その腹が裂けて黄色と、青いにゆるにゆるとした粘液に構わず、二枚の羽根を筆り取ったからだ。虫取り籠の中に仕舞つと得意顔でトーシャ(敏夫)を見上げていった。

「蝶々って羽根だけが綺麗だね。」

「……」

手についたねばねばの黄色の液を服で拭くと、あげは蝶の胸体をかまわず捨てた。

二人は手をつないで、声高らかに歌った。パパとママがするようにダンスのステップを踏みながら、トーシャ(敏夫)もふざけて小さなお姫様の手をキスして抱きしめた。

「トーシャ 大好き！」

シルヴァーナもキスを返してしがみ付いた。

女の子の唇に「ホー」と息が戻ってきた。

「もう少し、頑張ってくれよ。」

医者(敏夫)は

聞いたような気がした。今にも吹っ切れてしま

いそうになかった。女の子の肌は柔らかか

で、薄っすらと膜を張ったようだった。《と

ても疲れた！》

医者(敏夫)は母親に向かつていった。

「お母さん、もう大丈夫ですよ。」

母親はただ、ただ繰り返すばかりだった。

「エー」「エー」と「アリガトウゴザイマ

ス」「アリガトウゴザイマス」

赤毛のトーシャ(敏夫)の手の動きに連れ

て、女の子の肌に赤みがさしてきた。

トーシャ(敏夫)は、疲労を感じながらも

シルヴァーナのことを想い出していた。

赤く、白く、肌がむけて体液が黄色く、垢

が黒く、転がり、……白いパレットの中

で色は美しく混合した。絶え間なく動いて混

合し、白と赤で、モモ色に、黄色と赤は、赤

と黒と白で、柔らかい白い肌の上に線が引か

れ、消され、滑って流れた。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

すると、混合して一度に飛び込んだ色が、

眼前でパツト輝き幻影に感じる紛れもない愛

くるしいシルヴァーナの白い肌がそこに現

れていた。トーシャ(敏夫)の気力が次第に

萎えた。帰国後のカルチャーショックが、一

度きにトーシャ(敏夫)を襲った。

「おい！ 君どうした？ 今僕が代わるか

ら。」

素早く引き継ぎの体制をとって医者(敏夫)は、

「もう少し、ゆっくり、ほら、ワンツウス

リー・ワンツウ……」

「そうだ代わるぞ 片方の手！」

期せずして、敵視していた野次馬のなかから一斉にトーシャ(敏夫)の健闘を讃える拍手が沸き上がった。看護婦から渡された手拭で、顔の汗を拭くと、生来神経過敏症の上に、二、三日の睡眠不足がたたって、その場へたり込んだ。

「ホントニモウ、何トイッテ良イヤラ……オ礼の申シ上ゲヨウモアリマセン……ホントニモウ……コノ子ノ命ノ恩人デス……」

赤毛の転入生トーシャ(敏夫)は、母親の言葉を半ば放心して聞いているうちに、一人帰国してまるで異国の信州松本のこの地で、始めてやっていけそうな自信めいた嬉しい気持ちに浸っていた。溺れた女の子の兄もやっ

その後、日本国籍赤毛のトーシャ(敏夫)は、高校をでて上智大学に進学し、上智大学を卒業すると、再び両親の住むドイツに戻っていった。ペーターマン家の一人娘シルヴァーナと結婚したかどうかはわからない。

了